



惨めでない

ハイスクール・ライフなんて

いつだって ^{ECCO}嘘だ!



ひきこもり世代のトップランナー・滝本竜彦が
最新作をひっさげて『ファウスト』に登場!!

滝本竜彦

Illustration / D.K

●本文使用書体 / FOT-マティス V Pro L



プロローグ

それは夜だった。とても寒い夜だった。

パチンコ屋裏のグリーンポリバケツに腰を下ろした彼女は、両足をぶらぶらと揺らしながら、かじかんだ両手に「はあ」と息を吹きかけた。

その瞬間だった。小さな手のひらに、ほんの少しの温もりを感じたその瞬間、彼女は自分が「異邦人」であることに覚醒した。覚醒したことに覚醒した。

「うわあビックリした!」

あまりの驚愕にビクンと肩をふるわせた彼女は、宿主の脳と肉の影響を如実に受けた幼い口調でそう叫び、そののちゆつくり首を巡らせ周囲を観察した。

「で、でもダメだ、またECCOだ……!」

この粗大な視覚感覚は、ECCO以外の何物でもなかった。アスファルトを覆う雪から察するに、季節は冬で、ひどく寒かった。そんな夜にも一人きりでいたので、ついつい彼女は少しだけ寂しい気分を感じたが、それはいつの時代でも同じことだと思いつき、この嫌らしい肉体感覚と、ECCOの影響に支配されがちな脳感覚を、あまり気にはかけないことにしようと思った。寒くて寂しいけど、気にしない気にしない……

それでもスカートから伸びた両足の肌からは、青い静脈が透けていて、全身もふるふる小刻みに震えていた。どうしようもなく寒かった。

「ただどそれでも大丈夫！」と、ムリヤリ己を鼓舞してみる。

「そう——もうすぐ私は消える。我を忘れて眠って消える。はやく微睡み、この泥濘から逃避したい。雪に覆われたこの街がどれほど綺麗でも、綺麗さ美しさこそが泥濘の証明、ECCO仕掛けの世界の証で——」

「次に目覚めたときこそは、そこが故郷であればいいなあ」という儂い願いが、やはり今度も叶えられなかったことを悟った彼女は、「ふう」と小さくため息をついた。

ほら——ポリバケツの上に体育座りをして、暗い路地の中から繁華街の明かりを眺めてみれば、あっちの方にあるのは、クリスマス電飾に輝く遊技場、それに良い匂いがしてくる食べ物屋、そして酒屋に、あれはきつと連れ込み宿？

まさにここはECCO仕掛けの世界だ。苦痛と快楽が渦巻き続ける毎度恒例のECCO世界だ。それでもいつもの覚醒と一つだけ違うところがあって、それはこの肌を刺す寒さだ。

今度の覚醒は、とにかく寒くて凍えて、いつもよりずっと辛い。子供用コートの襟元をぎゅつときゅつと締めてみたが、それでもぜんぜん暖かくなならない。

「……………」

空はもうとつと真つ暗なのに、建物の明かりがピカピカ眩しく輝いていて、辺りはぼんやり明るく暖かそうさ。そして地面のアスファルトは柔らかな雪に覆われていて、知識としては知っていたが、肉の目、粗大な目で実際に雪を見るのはこれが初めてだ。なんかフワフワばかりかしてそうで、でも靴先でツンツンついてみれば、やはり冷たく爪先に染みだ。

「……………さ、寒いなあ」

誰にも聞こえない、自分にも聞き取れない小さな声で呟いてみる。すると余計に寒さがつゆり、すぐに後悔してしまう。孤独な気分も高まるばかりで大変だ。

向こうの繁華街を歩いてゆく人たちの息は白いけど、みんなニコニコ楽しげに笑っている。でも、ほんの数メートル離れた路地の中で震えている彼女の姿には、誰ひとりとして気づかない。仮に姿を発見されても、この微細な魂は、誰にも理解はされ得ない。だからいないと同じ、存在しないも同然の、あらゆる意味での非存在、それが彼女の正体で——

「ああ——」とそのとき、彼女はさらに大変なことに気がついた。

「私はまだ自分の真の名前さえ思い出せないでいる——！」

なんとなく、二十個近くの名前があったような気がした。そうとう大昔にはエピソードと呼ばれていた気もした。それにあの人は——数千年前のシリアで私を見いだし救いだしてくれたあの人は、売春宿で源氏名「レネー」と名乗っていた私のことを、仰々しくもソ